



Title	記憶と忘却：ベルクソンとリクール
Author(s)	大小田, 重夫
Citation	哲学, 44, 67-80
Issue Date	2008-02-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35052
Type	departmental bulletin paper
File Information	44_RP67-80.pdf



記憶と忘却——ベルクソンとリクール

大小田 重夫

はじめに

われわれは、過去からの情報によって、はじめてあるものを何かとして知覚することができる。知覚は過去とのかわり、つまり記憶によって可能となる。またわれわれの生活のほとんどが身体化された記憶つまり習慣からなっている。日本語で読み書きをし、和風の料理を好む。われわれがもしこうした日本人としての生活習慣を変えるためには、たとえば海外生活することによって別の習慣を身につける必要があるだろう。悪い習慣から抜け出すためには新たな習慣を必要とすることからもわかるように、習慣はわれわれの生の条件である。習慣を通して、われわれは過去の人々の記憶を保持し、共に現在を生きている他者と記憶を共有している。

習慣は、このようにわれわれを縛るだけではなく、さまざまな仕方で組織化され、生を多様化して行く。ベルクソンは「記憶」を「存在が事物の流れのリズムから自由になつて、より過去を保持することによって、未来にますます強く影響を与えることを可能にするある内的能力」と規定した。未来へ向けての躍動（élan）と過去の推進力とをひとつの直観へと統合し、それを記憶と呼ぶのである。われわれは過去から完全に切りはなされて存在することはできないが、それでも過去に完全に縛られてしまっているわけでもない。われわれの生はひとつの記憶として、こうした

固定性と開放性との、あるいは束縛と解放との二極構造として把握できる。ここでは現在とは、過去の現在である記憶、未来の現在である予期、そして現在の現在が重なり合う厚みを持ったものである。

ポール・リクールは、自己同一性を「物語的自己同一性」として把握するが、それは、こうした現在の厚みのなかで、また共時的に存在する他者との関わりにおいて形成される同一性である。われわれは、過去に自分が為したこと、考えたこと、感じたことを「記憶」として保持し、現在を生きている。また現在において、例えば他者と約束を交わすことによって、彼らと関わり未来へと企投する。彼は、『他者のような自己自身』において、物語的自己同一性を物体の同一性や人格の同一性から区別し、「同一性」(identité-idem)と「自」性」(identité-ipseité)との二極構造、つまり固定性と開放性との二極構造として把握する。²「同一性」とは、時空間において個々の人間が、様々な他の人や事物とは区別される不変なものとして存在するあり方を意味する。「同一性」は、例えば遺伝子、身体の特徴、すでに獲得された習慣などによって識別される。これに対して「自己性」とは、新しいことを創始する独自の能力を有した存在の特性である。われわれは他者と約束を交わすことで、自己を未来へと向けて拘束することにより現実の世界に介入し、そこに新しい流れをもたらす。またすでに獲得した習慣を元に、新たな習慣を組織化し、自分を変化させていく。「自己性」は、「同一性」には回収されえない自己同一性のもう一つの契機である。

このようにリクルールの「物語的自己同一性」という概念には、人間の生を固定性と開放性という二極構造として把握する点で、ベルクソンの「記憶」と通低するものがある。しかし晩年の『記憶・歴史・忘却』において、リクールがベルクソンの記憶論を高く評価し、それについて詳細な分析を行うまで、リクルールの哲学にベルクソンの思想が影を落とすことはほとんどなかった。その理由の一つは、リクールがサルトルと同様、ベルクソン哲学に反発した世代に属していたことにある。またリクールは、言語を自己と世界、自己と自己、自己と他者を結ぶ媒介と見なすことで、客観的時間と主観的時間のアポリアを「物語られる時間」によって解決しようと試みたが、彼のこうした解釈学的現

象学のうちには、言語を知性の道具と見なすベルクソンの直観の哲学を受け入れる余地はなかったからである。³
リクールは、『記憶・歴史・忘却』において、ベルクソンの記憶論を記憶の対概念である忘却についての理論として提示する。本稿は、リクールの哲学におけるベルクソン哲学受容の意義を明らかにしようとするものである。

I 内的視線の伝統

記憶は、本質的に私的なものであり、記憶力は根本的に単数である。⁴ 私の思い出はあなたの思い出ではない。リクールによれば、アウグスチヌスの『告白』は記憶をその主体との関連で主題化し、思想史において「内的視線の伝統」⁵を創始した。自己の記憶に関する記述には、「告白」の他に「自伝」がある。「自伝」においては、過去から現在までの自分の行為や自分が関わった出来事について、さらにはそれらの行為や出来事についてどのように感じ、どのように考えたのが記述される。「告白」も自伝と同様に、それらについて記述するのであるが、たんにそれだけではなく、その当時感じたことを今現在どのように感じ、考えているのが語られるのである。こうした意味の「二重化された意識」こそが告白なのである。

こうした「内的視線の伝統」は、ジョン・ロックによつて、人格の同一性という問題とともに反省の理論として継承される。記憶力のうちには、本質的に私的なものであるという特徴に加えて、意識と過去との関係がある。記憶は過去についての意識であり、過ぎ去った印象についての意識である。ロックの思想において、記憶は人格の同一性を保証する、反省の過去への時間的延長として登場する。ロックによれば、各人が同一の自己であるのは、それが何らかの実体に依拠しているからではなく、反省意識によつて同一性が保証されるからである。「この人格の同一性は、この意識が遡及的に、ある過去の行動あるいは思考に到達できる限り、それだけ遠くにまで達する。当時あったのは

いまと同じ自分であり、その行動をなした自分は、いまそれについて省察する自分と同じなのである」⁷。こうして、意識、自己、記憶が完全に等しいものとなる。

しかし、人格の同一性に関するこうした記憶説には様々な問題がある。たとえば、忘却や睡眠による意識の消滅にともなって自己が消滅すれば、人格の同一性について語ることができないという問題。さらには、脳に重大な損傷を受けた人に、別人の脳の内容がコピーされ移植された場合、彼は別の人格になるのかという問題。こうした問題にもかかわらずロックは、意識の諸状態の複数性と関連した多様性を考慮することなく、多様であるはずの自己を反省的同一性の中に回収してしまう。『人間知性論』のロックにとつて、人格の同一性とは、物がそれ自身と同一であり他の物ではないという意味で同一であるのと同様であり、人格に固有の「自己性」は、人格同一性に対していかなる役割も果たしていない。

Ⅱ 痕跡の消失と痕跡の存続

ロックの記憶説による人格同一性が、「同一性」にとどまり「物語的同一性」と無縁であるのは、ここでの記憶が過去の忠実な反復あるいは再現と見なされているからである。記憶については、今ここに存在しない物が、イメージとして現前しているというアポリアが指摘されてきた。このアポリアに対するひとつの解決としてプラトンの『テアイテトス』における刻印の観念がある⁸。指輪によって蠟の上につけられた刻印が、記憶のモデルであり続けた。さらにこの刻印の比喩は、「痕跡」という概念に置き換えられる。神経科学が扱う大脳皮質の痕跡、印象という心的な痕跡、私的あるいは公的な文書館に保管される文書としての痕跡、これらが私たちの私的あるいは公的な記憶なのである。

「痕跡」という觀念には、それが消去されうるといふ意味が含まれている。痕跡の消去といふ觀念は、記憶が忘却されるといふ脅威を直ちに連想させる。神経科学は、記憶痕跡を大脳皮質に局在化させ、忘却を記憶痕跡の消失がもたらす決定的忘却として、あるいは記憶の機能不全と見なす。それゆえ、忘却は老化や死を連想させる。われわれは、忘却を遠ざけようと、記念写真を撮ったり、日記をつけることなどで、過去の一部だけでも何とか手の内にとどめておこうとする。しかしこうした努力もむなしく、過去の多くはわれわれの手から滑り落ち、われわれは二度とそれらを手にするのではない。

このように一方では、取り返しつかない「決定的な忘却」の脅威がある。しかし忘却に関しては、以下のような逆説がある。忘却によって失われた対象とは、まったく完全に失われてしまったものではなく、人がある仕方では記憶の中に持っているものではないのか。そうでないとすれば、忘却の後に再び見出されたものが、探し求められていたものであったと判断することはできないからである。またわれわれは、忘却によって奪われてしまったはずの一片の過去の再来を歓迎することもある。不意に耳にしたメロディーに、あるいは口に運んだ食事の味に、過去の幸福な瞬間が思い起こされる。記憶には、リクールが「幸福な記憶」と呼ぶ、こうした「無意志的な記憶」が存在する。

こうしてわれわれは、「痕跡の消失」による「決定的な忘却」と「痕跡の存続 (survivance)」による「保留された忘却 (oubli de réserve)」という二種類の忘却¹⁰について語らねばならなくなる。リクールは、ベルクソンの記憶についての哲学を、「保留された忘却」についての哲学として解釈しようとする。ベルクソンが『物質と記憶』で問題とするのは、大脳皮質の痕跡と印象としての心的痕跡の関係である。後者は、刻印というより、忘れたがたい、あるいは衝撃的な出来事により心に残される情感という意味での印象である。ロックが、人格の同一性の問題を実体の觀念に依拠させることを回避するために、記憶を意識現象とのみ見なしたのに対して、ベルクソンは記憶を心身問題の核心に据える。

『物質と記憶』の中心となるテーゼは、脳は表象ではなく行動の器官なので、心的な痕跡は大腦皮質の痕跡の中にその説明を見出すことはない、ということである。大腦のどこに記憶が保存されているのかという問題は消滅する。ベルクソンは「記憶はそれ自身保存されている」という「痕跡の存続」を主張する。リクールは、記憶が物質に依存することなく存続するというベルクソンのこの形而上学を支持する。

『物質と記憶』においては、記憶の二つの形態が区別される¹¹。記憶は習慣である「運動機構」と「自発的記憶 (souvenir spontané)」という二つの形式において存在している。自転車に乗るためにわれわれは何回も練習を繰り返す。いったん乗れるようになれば、それは習慣つまり「運動機構としての記憶」として獲得されたのである。またわれわれは、このような運動機構としての記憶が成立するまでの各々の練習を、それに付随するいくつかの出来事とともに思い出すことができる。それは正確な日付と場所によつて規定される個性を備えた記憶である。これは「自発的記憶」と呼ばれる。われわれは現在自転車に乗るときにこれらの個性を備えた記憶を一つ一つ思い出すことはない。しかし、これらの記憶のすべては私の自転車に乗るこの行為のうちに収縮されて存在しているとベルクソンは主張する。

われわれは、さまざまな水準で心理的生活を営んでいる。一方では、行動へと向かい純粋な身体的運動へといたる方向があり、他方では純粋な観照へと向かう。われわれの心理的生活は、これら二つの限界を前提として、この二つの方向のどこかある水準に位置を占め、その水準に応じて収縮する。現実化されうる記憶はその水準にある記憶のみである。しかしいっさいの記憶が潜在的に存在している。ベルクソンは、こうして記憶を心理生活の水準の移行という想起の努力と結びつけ、物質のうちに残された痕跡という硬直したイメージから解放する。

ここでフロイトの思想とベルクソン哲学が交錯する。記憶を大腦皮質の痕跡とみなすのであれば、私たちは忘却を決定的なものとなさざるを得ない。しかし精神分析の理論に、決定的な支えをあたえたのは、フロイトの行う治療

が突き当たたる障害、つまり様々な抵抗であつた。意識の水準での忘却は、抑圧の仕業つまり能動的な忘却なのである。精神分析は、人は意識の主体ではないが、それでもなお人は自らの行動に責任を負わねばならないという不安を引き起こす一方で、人は恐れているほどに忘却することはないということを教える。記憶は、潜在的に存在しており、現在知覚されていない外的諸事物が現実存在を有するのと同様に、記憶にもそれと同等の現実存在を認めることができるのである。¹²

Ⅲ 忘却と約束

われわれは、自分が過去に為したこと、考えたこと、感じたことを「記憶」として保持して現在を生きている。また現在において、例えば人と約束を交わすことによって、他者と関わり未来へと企投する。記憶と約束は、その実行の瞬間において、人格的同一性を構成する「同一性」と「自己性」のそれぞれの価値を代表する。記憶の主要な強調点は、同一性におかれており、自己性という特性はまったく不在である。約束に関しては、自己性の優位が大きく、約束は自己性の代表的な事例とみなされる。リクールは、「記憶」と「約束」という二つの概念が相互に関連しあっており、その連関は自己の再認という「生きた現在」に時間的な豊かさを与えていると主張する。¹³

しかし一般に、記憶は過去に向かい回顧的であり、約束は未来へと向かう前望的なものとみなされている。両概念をただこうした対立する側面からのみ把握し、相互の連関が考慮されないならば、現在は過去と未来という逆方向へと向かう働きの結節点として把握されるほかないであろう。もし現在がこのように理解されるなら、それはたんなる恣意の働きとなり、物語的自己同一性を形成しようとする人間の試みは停止し、自己同一性は崩壊するしかないであろう。しかしリクールは、現在が恣意的なものではなく「わたしはできる」という自己の能力によって、裏打ちされ

ていると主張する。

われわれは、「痕跡の消失」という観念、「決定的な忘却」から「痕跡の存続」、「保留された忘却」を区別した。「痕跡の消失」がもたらす決定的忘却は、機能不全と見なされ老化や死を連想させるが、今やわれわれは「痕跡の存続」、「保留された忘却」という観念によって、生における役割というポジティブな側面から忘却を把握しなおすことができる。

「約束ができる動物を育てること、これは自然が人間に関してみずから出した逆説的な課題ではないか。これこそ人間の本当の問題ではないか。しかしこの問題が広範に解決されるということは、どんな反対する力が、つまり忘却の力がそれに働くかを知っている者は、驚かすにはいられない。」¹⁴ここでニーチェは、忘却を単なる惰性的な力ではなく、「能動的な阻止能力、厳密な意味での積極的な能力」と見なしている。もしわれわれが、過去に経験したこととのいっさいを顕在的に意識し続けなければならないとすれば、過去に悩まされ何ごとにも片をつけることができず、未来に向けて新たなことを計画したりすることはおろか、幸福で安静な現在を生きることもできないであろう。忘却は、生の喧騒を征服する能力としての心的秩序、安静を維持する積極的な能力である。われわれは、過去の自分を許すことで、現在の自分を受け入れ未来へと向かうことができる。こうして、回顧的であり「同一性」を代表するものと見なされていた記憶の陰である忘却が、前望的で「自己性」の特徴を帯びたものとして把握しなおされる。

これとは対照的に、われわれが記憶とは反対の場所に定位させた約束が、記憶の支配圏のうちに現れてくる。約束が可能なのは、能動的な力である忘却に逆らう記憶力の働きによる。リクールは、忘却に逆らうこの記憶を、任意の記憶力ではなく、自己性の記憶力、「意志の記憶力」、「過去の契約に基づいて未来を規制する記憶力」と言い換えている。¹⁵

リクールの考える、記憶と約束のこうした干渉は、ハンナ・アーレントが赦しと約束との間に立てた関係を反映し

たものである。¹⁶ リクールがニーチェに加えてアーレントに注目するのは、彼女が人間を孤独では存在し得ない複数存在と見なし、赦しと約束という二つの能力を複数存在に属した能力と見なしている点である。¹⁷ 人間は、自分の行った行為から生じるすべての結果を予言することはできない。しかしいったん為された行為をなかつたことにすることは不可能である。赦しは、われわれを行為の結果から解放することで「活動の不可逆性」に対する救済を行う。われわれは過去から解放されることで、生を継続することができる。また逆に人間の活動は、未来に向けての不確かさを内包している。われわれは自らの行為あるいは他人の行為をあらかじめ予見できなければ、自分のアイデンティティを維持したり他人を信頼することはできない。人間は約束によって、自らを束縛することで「活動の予言不可能性」に抗する。「誰も自分で自分自身を赦すことはできないし、自分一人きりだと、われわれは力も目的もなしにさまようだけ」¹⁸である。赦しと約束つまり解放と束縛は、「物語的自己同一性」の形成を継続する上での前提となる条件なのである。

Ⅳ 人間の複数性

リクールは、彼の「自己の解釈学」の推進力になったのは、まずデカルトのコギト哲学、ジョン・ロックの反省哲学であり、次にカントによつてなされた反省的な問題系の実践的な領野への拡張であつたと述べている。しかしリクールは、カントにおいては自律概念の自己がそのものとしては主題化されておらず、自己指示の能力として特徴づけられてはいないと主張する。というのも、カントにおいて自己は「自律概念の土台にある総合判断において法則の觀念に結合している、審判者の同義語」¹⁹として特徴づけられているからである。つまり自己は、自己の格率が定言命法の基準である普遍性を満足させるか否かを認識する審判者であり、実践的領野で自ら格率を生み出し行為するアクター

として主題化されていないからである。

こうしてリクールは、行為する人間の諸能力の考察へ向かい、能力という観点から約束という言語行為を分析している。²⁰ 約束は、主張、宣言、要求、感謝といった発語内的行為であり、その全体的な意味は真理条件によって汲み尽くされてしまうものではない。これらの言語行為においては、さまざまな意味が命題に接ぎ木され、意味と用法は切り離すことはできない。言語行為の中でも、約束はフランス語の代名動詞という形式をとる動詞である。代名動詞のひとつの用法である再帰的用法は、主語から出た行為が、主語自身に帰ってくる意味を持つ。こうした動詞を使用する話者、たとえば「私は借金の返済を約束する (se promettre)」と語る話者は、約束という言語行為を行うだけではなく、未来の行動へと向けて自らを約束する。それでは約束は、自らを約束するこうした力をどこから引き出してくるのであるか。リクールは、約束の言語学的な分析は、道徳的反省を要請すると主張する。

約束を為す話者は、単なる自己関係のうちに閉じているわけではない。彼は、自分の語ることを為すという責務のもとに置かれるだけでなく、対話者にとってよいものとみなされた何かを為す、あるいは与えるように拘束される。約束は、自己を約束するという行為である以前に、まずもって対話者へ向けられたものである。それは、他者を媒介として自らと関係するものである。われわれが感情について約束することができないのは、感情が私たちの思うがままにならず、他者との関係のあり方によって変化するためである。

△今△、△ここ△での単発的な約束の拘束力は、諸状況の変化や感情の変遷にもかかわらず、あらゆる状況において約束を守るという「根本的な約束」からその力を得ているのである。諸状況の変化や感情の変遷にもかかわらず自己を維持するという、この「自己性」は個体の生物学的あるいは性格的な同一性に由来する自同姓とは異なり、恒常性の意志、自己の保持の意志によるものである。

ニーチェは、「約束する能力」について語っているが、²¹ リクールは、この能力が「語る能力」や「世界に働きかけ

る能力」などの知的能力あるいは身体能力とは異なり、「信託に基づく能力」という能力の新たな次元に属するものであると主張する。私が今、語るかどうかは別にして、私は「語る能力を持つ」ということができる。こうした意味で、身体あるいは知的能力がその実際の行使とは別に、それ固有の意味を持つのに対して、実際に約束を守ること以外に、「約束する能力」を持つていることを証明することも維持することもできない。「約束する能力」とは複数存在という次元において初めて語りうる能力である。「困ったときには嘘をついてでも、人から借金をしよう」という格率を採用しようとする者も、自己の格率が普遍性のテストに合格するか否かを審判する以前に、行為者としてこの格率を採用可能なものするために信託の次元に加わり約束を実行してはならない。

こうした信託に基づく側面は、記憶の外在化であり、許しを可能にする証言という言葉行為にも共通のものである。証言は、その発語内の力に関しては断定のカテゴリーに属している。しかし証人は、彼の日常的な行動によって宣言を確かなもの信頼できるものとしなければならない。

むすび

リクルは、過去と過去とのわれわれのかかわりを理解しようと努めた。もちろんわれわれは、いつさいの過去に到達できるわけではない。にもかかわらず、記憶、証言などの様々な過去の痕跡が残っている。われわれはそれらの痕跡をとおして過去を現在において再現しようと試みる。しかし、過去を完全に再現するという試み自体が、失敗を運命づけられたものである。記憶が、過去に忠実であろうとするのは「野望」であって、記憶にはその陰として忘却がつねにつきまといっているからである。「物語的自己同一性」も歴史もともに人間の複数性を前提とした信託の次元において形成されるものである。

リクールは、歴史についての知が絶対的な知となることを正当に望みうるといふ主張に対して一貫して反対する。それゆえ、ヘーゲルやマルクスのような主張、つまりすべての局地的な歴史を統合し、それらの歴史を完全に理解可能にするような普遍的な歴史が存在するという主張を拒絶する。他方で彼はまた、歴史家に接近可能な解釈不要の生の事実が存在するという実証主義的な理解をも退ける。

ベルクソンが生きた19世紀後半から20世紀前半という時代は、ダーウインの進化論の衝撃のもと、自然淘汰による進化の思想を社会現象にまで適用しようとしたスペンサー流の社会ダーウィニズムが流行した時代であった。実証主義隆盛の中で、人間は遺伝と環境に支配されているという科学主義的な決定論が支配し、生存競争の概念は、不適格者は淘汰されるというベシミスティックな宿命論の色彩を濃くしていた。ベルクソンの哲学は、こうした科学主義的な決定論に抗して、決定された未来という脅威から人間を解放する自由の思想であり、機械論も目的論も説明し得ない発明や創造を生命進化のうちに認めようとする思想であった。

リクールの『記憶・歴史・忘却』における主題は、赦しであった。国連がジェノサイドを「人道に反する罪」と定義し、それに対して「時効なし」と定め、フランスでも、戦時中にユダヤ人強制移送に関わった責任者たちの裁判が相次いで行われた。²² 赦しとは困難なものである。それは、過去のある行為を記憶していながらもなお、行為者をその行為から解放することだからである。単なる忘却つまり「痕跡の消去」としての忘却は、真の赦しではない。赦しの後にも、痕跡は存続し続ける。リクールは、ベルクソンの哲学を未来の決定という脅威から人間を解放する思想としてではなく、忘却の哲学つまり過去からの解放による自由の哲学として捉えなおしたのである。

1 H. Bergson, *Matière et mémoire*, PUF, Paris, 1939, p.249-250.

2 P. Ricoeur, *Soi-même comme un autre*, Seuil, Paris, 1990. 『他者のよびな自己自身』久米博訳、法政大学出版局、一九九六年

- 3 リクルール哲学とベルクソン哲学の対立点については、以下の論を参照した。久米博「いま、ベルクソンを読む―記憶・文学・忘却」、『ベルクソン読本』久米博、中田光雄、我孫子信編、法政大学出版局、二〇〇六年
- 4 P・リクルール『記憶・歴史・忘却へ上へ』久米博訳、新曜社、一六二頁
- 5 P・リクルール、同上、一六一頁
- 6 『アウグスチヌス、ハ私Vのはじまり』、富松保文著、NHK出版、七九頁
- 7 J・ロック『人間知性論（二）』第二卷第二十七章、大槻春彦訳、岩波書店、一九七四年、三二三頁
- 8 プラトン『テアイテトス』田中美知太郎訳、『プラトン全集2』、岩波書店、一九七四年、三三六頁
- 9 アウグスチヌス『告白』第十卷第十八章
- 10 P・リクルール、『記憶・歴史・忘却へ下へ』、一九九頁
- 11 H.Bergson, *op.cit.*, p.81
- 12 H.Bergson, *op.cit.*, p.161
- 13 P. Ricœur, *Parcours de la reconnaissance, Trois études*, Stock, Paris, 2006, p.165
- 14 F・ニーチェ『道徳の系譜』信太正三訳、『ニーチェ全集』第11巻、ちくま学芸文庫、一九九三年、四二三頁
- 15 P・リクルール、前掲書、三二八頁
- 16 H・アーレント『人間の条件』、志水速雄訳、ちくま学芸文庫、一九九四年、三七〇頁
- 17 P. Ricœur, *op.cit.*, p.194
- 18 P・リクルール、前掲書、二九六頁
- 19 P. Ricœur, *op.cit.*, p.138
- 20 P. Ricœur, *op.cit.*, p.190-192
- 21 F・ニーチェ、前掲書、四二三頁
- 22 リクルール『記憶・歴史・忘却』の社会的、思想的な背景に関しては、『記憶・歴史・忘却へ下へ』に付されている久米博氏の訳者

あとがきに詳しい。